嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第22号／１９９２年（平成４年）６月発行（年３回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1−30−9（〒156）
ＴＥＬ　03−3426−2323
・発行人＝石井哲夫　　・編集人＝友田篤

今　こ　そ　受　容　を

阿　部　秀　雄

通園施設から保育園に移ったMちゃんが、夜中に起きてピアノをたたいたりなど、すっかり落ち込んでしまった。担当の保母は、園に慣れれば乗り越えられるから、早く保育時間を延長したらよい、と勧めてくれたそうだが、親にしてみればその提案には乗り切れない不安があった。かつて通園施設で母子通園から単独通園に切り替えたときもやはり同様に落ち込んでしまい、その状態のさなかで私と出会い、心理指導を始めてようやく立ち直ってきたという経緯があるからだ。

母子分離を始めるたびに落ち込んでしまうという背景には、ごく小さいときから母親が外の仕事に出かけ、しばしば夜遅くなってから帰宅しなければならなかった、という外傷的な体験がある。だから、似たような体験を繰り返すたびに、古傷がうずくのである。

そんな過去のつらさを再度慰めたり、新しい集団生活のおぼつかなさに共感したり、あれこれ言葉を尽くして心をなごませようと努めたが、Mちゃんはシラッとしていた。最後に「お迎えの時間を早くとか遅くとか、保母さんやお母さんや阿部先生や、おともだちがかってに言い合うだけで、肝心のMちゃんの気持ちをまるで聞こうとしなかったねえ」と謝ったら、たちまち激しい怒りが爆発し、延々と続いた。積もる思いをようやく分かってくれたか、と思わせるような怒りだった。

母子分離とか外傷体験とか言うが、体験そのものよりも、体験にまつわる思いをどう分かってくれたか、体験に向けてどんな思いやりを示してもらえたかによって、傷つきもすれば納得もするのだ。その日から、Mちゃんの様子が目に見えて好転した。

基本的な思想を共通に持ちながら、自分とはちょっと違った持ち味を発揮している相手と一緒に仕事をするのは、とても楽しい。互いの持ち味が響き合って、互いの琴線に何かを残すからだ。石井哲夫先生のご配慮で、毎週のびろ学園に通うようになってから、私が味わっている楽しみがこれである。

私は石井先生の「受容から交流へ」というお考えを、子どもの気持ちをおとなが受容することと、おとなの気持ちを子どもに受容してもらう（「おにいさん」らしい行動を要求する）こととのやりとりを深めて行くことで、人間的な交流が育つのだと読み解いてきた。要求することで自閉的な殻を崩して子どもの本音に触れ、受容することもでき、交流を深めることができる。

だからMちゃんにも、言葉の勉強とかいろいろ求めることをしてきたのだが、それが一方的な訓練という形でなされたとしたら、不快緊張をかえって強めるばかりで、子どもの社会的情緒的な成長を助けられない。

世の中を見渡すと、「受容はダメ」という風潮がなきにしもあらずだが、とんでもない話だ。子どもに要求を強めれば強めるほど、子どもの立場に立ち、子どもの気持ちに共感する受容的な姿勢が求められるのである。

（日本抱っこ法協会会長）

社会福祉施設の応援団をかってでて三十年余りの歳月が過ぎたが、少しもその甲斐がないような感じである。これまでの応援の仕事が時代の流れに逆行しているような意味もあって気が重いのである。敢えてこの役割を勤めさせてもらっているのは、何とも切ない多くの友人達がいるからなのである。この友人達とは、第一は利用者達であり第二は職員達である。

「社会福祉施設には、専門性が大切である」ということが言われている反面、その専門性に関する内容の検討がなかなか明確になっていかない。一頃は療育が必要な利用者のいる施設の場合は、「療育の専門的な技術を持ってその専門性とする」という考えであったが、どうもこのような専門性は、社会福祉施設になかなか広がっていかなかったようである。それは、療育についての研究が進まなかったということなのであろう。そして今日のように「社会福祉施設の社会化」が叫ばれるようになってくると、この社会化をめぐっての社会福祉施設職員の専門性という新しい課題が検討されるようになってきたのである。

この新しい社会化という専門性は、前述の療育のような狭い視野に閉じ込もりがちな施設職員には全くといって良いほどの方向で逆の努力を求めるものと言えよう。

社会福祉士の資格を検討する際にその専門性についての論議が盛んに行われたが、その専門性とは、ケースマネージメントであることを主張した人が居た。おそらくその人はケースマネージメントが何事であるか分からぬままに述べているようなところがあって、処遇実践との関連が明確にされていなかったようであった。いつまでも社会福祉施設の処遇職員をソーシャルワーカーの助手のような低い立

施設経営の創造性（その十三）

石井哲夫

場に立たせようという考えがなくならない以上は、我国において、社会福祉の直接処遇の専門性が身についていなかったのである。社会福祉施設の現場ではかなり質の高い実践が行われているにも関わらずこれを取り上げる能力を持った指導者が極めて少なかった。これからは、個々の施設内においてまず直接処遇の整理を行い検討して実践の理論化を進めていかなければならない。

例えば生活施設における生活の決まりは、個々の利用者にとっていかなる意味があるのかを考えてみると、これが息切れのするような圧力となったり、逆に、他人にもそれを守ることを強要するゆとりのある利用者もいるわけである。

従って処遇上の検討は、集団生活における生活の構造や機能が個々の利用者にとって、どのような意味を持っているかを検討することから始められ、そこから利用者にとって生活の学習上どのような変更が必要になってくるかが分かって来るわけである。

すなわち「個々の利用者を単純に安定させていくような構造化をはかることではなく職員が個々の利用者の側にいて、その利用者の生きていくすべに十分付き合っていくこと」でありそこには、「人間としての生命の維持だけにとどまらない人間としての気持ちの涵養や充足」が望まれるのである。とすると、社会福祉施設の処遇職員は、基本的に臨床心理技術の修得が望まれるものである。

臨床心理技術といってもその内容としては、人間の行動の理解であって、その外側に現れた情景としての行動だけでなくその行動の内側に潜んでいる人間の深層心理問題や、生まれてから経験してきた人生の歴史の中に見られる行動の形成原因を取り上げ、「総合的な人間理解」を目指すものである。

社会福祉施設の経営に当たって言いたいことは、このような人間集団において、多くの人が満たされよりよい生活が送れるようになって行けるためには、指導者の心構えの中に、「人間主義に基づく人間心理への深い洞察とそれに基づく行動力」が求められるものであろう。ところが現実には、社会福祉施設では、人間主義というより極めて目敏い人の新奇なものを追い求めていく万華鏡的な指導者の考えに振り回されている状況である。

さらに個別的な処遇の質を高める施設経営の目標から一気に地域に目配りをして在宅援助へのケースマネージメントへ向かおうとする施設経営に良識を感じさせられないのは、私のみであろうか。今こそ施設経営者の基本的な経営理念の根幹を問いなおして、その実践を競いあう時だと思うし、その基盤が築かれてこそ地域から信頼を得て、在宅援助への支援が可能となってくるものと考えるのであるがどうであろうか。

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

子どもの部屋

石川章子

〝子どもの部屋〟は、子どもの生活研究所の奥の奥、渡り廊下の先にあります。通称（愛称？）の〝とらのこ〟が示すように、大切な大切な、正に宝物のようなお子さんたちをお預りしています。

●〝子どもの部屋〟の保育

朝一番早いのは、一歳三カ月のやっちゃん。八時にはドアを叩きます。お母さんに「バイバイ」と手を振って…という日ばかりではありません。外へ出たくて、お母さんと離れ難くて大きな口をあけて泣くこともしばしばあります。そして八時半に二人、九時には十人「おはよう」と、次々やって来ます。お母さんと「バイバイ」「いってきまーす」「お母さんもお仕事頑張ってね」と、機嫌良く別れて保育室の中に入ってこられるように迎えることは、なかなか難しいものです。

十時になると二歳児以上の子どもたちが幼稚園へ行きます。お留守番は五～六人。（秋には一歳児が二人増える予定です）昼食までの一時間半、近くの公園に出かけたり、砂場や二階で遊んだりします。これらは、その日の天候や子どもたちの健康状態、年令などを考えてプログラムを決めています。

昼食はお弁当と給食。五～六人分の給食は早番の職員が作ります。「マヨネーズかけて」「これたべるとびじんになるよね」「あらら、食べながら眠っちゃった」等々、楽しいひとときです。食事が済むとお昼寝。体と気持ちを落ちつかせるようにしています。四時頃におやつ。そして五時、六時にお迎えとなります。

●〝子どもの部屋〟の職員

すこやか学園（幼稚園）の職員と、とらのこの職員七名が担当しています。幼稚園の保育時間帯は三名です。幼稚園が終わると順次、子どもと一緒に職員も「ただいま」と、とらのこに帰ってきて、食事、着替え、掃除、洗濯、寝かしつけ、連絡帳、と仕事を分担して行っています。袖ケ浦の学園利用者の湯浅さん、工藤さんのお母さんが週三日お手伝いに来て下さっています。

職員の話し合いは毎週木曜日、半数のお子さんが帰った五時過ぎから始まります。金井先生のアドバイスを受けながらの子どもの話、保育の話は尽きることなく、七時近くまで続きます。この二時間はとても大切な研修の場です。（おなかは空きますが）

子どもも職員も、一日の大半を過ごす〝子どもの部屋〟。家庭的な雰囲気の中で、共に育っていける部屋であり続けたいと思います。

（子どもの生活研究所）

皆々様に支えられて

●感謝のご芳名

（ご寄付いただいた方）

平成三年度（平成三年四月より平成四年三月）世田谷区及び袖ケ浦の本部、事業所に金品のご寄付をいただいた方々のご芳名を掲載させていただきました。衷心より感謝申し上げる次第です。なお、年二回のバザー開催に際しては、多大の方々のご協力をいただいておりますが、紙面の都合上掲載はできませんでした。どうかご了承下さい。（順不同）

小野澄江様、㈱学習研究社様、鈴木豊子様、宮内章様、中西健一様、綿貫光郎様、梨本澄子様、三町守隆様、福原真智子様、瑞穂工業技術研究所様、岡庭博様、㈱武居工務店様、竹内靖夫様、清水弘様、晃商事株式会社様、千葉興業銀行ともしびの会様、桜井常博様、吉田瀧太郎様、吉田きく様、山口潔様、池上嘉信様、荒井恒夫様、フラワー研究会様、東洋英和女子短期大学宗教部様、千歳丘教会様、土谷新様、原田知道様、斉藤穂様、嬉泉後援会様、松尾洋光様、伊藤公子様、宇田川紀通様、世田谷区様、㈱リクルート様、イトーヨーカ堂様、NTT様、大日本法令印刷様、大渡株式会社様、日立親切会様、金塚巌様、嬉泉病院様、間宮たかし様。

（袖ケ浦地域協力者）

千葉県袖ケ浦地域でのボランティアの方々、利用者の雇用や実習を受け入れて下さった事業所、また、日常的に「のびろパン」や「やきいも」等の販売に協力して下さっている方々、養鶏・牧場作業に無償で野菜や貝殻等を提供下さる方々、あるいは地域での各種のイベントにお誘いくださり協力をいただいた方々のご芳名です。（順不同）

スーパーしんめい様、ビジネス旅館長浦様、㈱富士住建様、特老袖ケ浦菜の花苑様、春日裕様、手作りケーキの店ポニー様、古川皮膚科医院様、東京電力労組木更津工務支部青年部様、河村義昭様、袖ケ浦市社会福祉センター様、袖ケ浦農協長浦支店様、同根形支店様、特老サニーヒル様、シマムラ文具店様、主婦の店さつき台店様、黒木照子様、新谷多恵子様、井村ますみ様、明峯和子様、提橋元子様、ブックセンターフォト今関渡辺様、ドラッグニシカワ様、いその文具店様、成松薬局様、シバサキ建設様、野里公文塾土屋様、福王台保育所様、根形保育所様、袖ケ浦市財政課様、同健康管理課様、同生活環境課様、同保健センター様、千葉興業銀行袖ケ浦支店様、三育フーヅ様、平川文化財センター様、斉藤とも子様、三浦トヨ子様、松崎きみ子様、とんかつ不二亭様、東京ガス木更津営業所様、袖ケ浦市民会館様、根形公民館様、平川行政センター様、平岡公民館様、袖ケ浦郷土博物館様、長浦駅様、袖ケ浦市消防本部様、鍋島金物店様、秋元カク様、富士食堂様、ニッセイ袖ケ浦支社様、ミニストップ長浦店様、花川金物店様、保坂石油様、県立袖ケ浦高校様、松本一男様、渡辺義一様、黒川孝男様、仲田由夫様、平野米穀店様、カネサカ水産様、

嬉泉祭りバザーを開催して

袖ケ浦のびろ学園・ひかりの学園では、平成四年三月一日に「嬉泉祭りバザー」を開催しました。当日は前日の雨と風が止み、暖かでしたが決して好天に恵まれたとは言えない天候でした。にもかかわらず、バザーにおいでくださったお客様の列は一日中途絶えず、一時は一〇〇台分を予定に作った駐車場が満車となり、取り付け道路に縦列駐車した車が公道まで続いてお客様に入場を待っていただくという事態も起こるほどでした。来客人数は約一五〇〇名で、ほとんどが袖ケ浦市と市原市の方々ですから「嬉泉祭りバザー」がいかに地域に浸透してきたかが分かります。

約二カ月半の準備期間の最初の活動としてバザーの宣伝が始まりました。普段はあまり感じなかったのですが、学園と地域とはいろいろなルートによってつながっていること、そして支えられていることを感じました。まず、学園と周辺の町内会とのつながり、施設同志のつながり、利用者たちが買物に行ったり、パンの販売を通し

て関わっている商店や事業所、公的施設、保育所や学校、子供会や老人会、学園が取り引きしている業者、毎年地域のイベント等に参加して知り合った団体等など、いろいろなつながりを確認する機会となりました。

町内会にはバザーのおさそいのチラシを回覧していただきましたが、「できるだけ多くの人の目に止まる日に回覧しようと思います」と回覧する時期を考えてくださっているのが嬉しく感じました。またある施設からは「ポップコーンの機械を新しくしたので使ってみませんか」と声がかかり、当日は二名の職員の方が材料持参で実演販売してくれました。

献品してくださった方々も「房総ファミリア」という地域の新聞や「袖ケ浦市広報」に掲載していただき、それを見て献品してくださった方も多々あります。学園では職員が手伝いの出来る利用者と一緒に取りに行きましたが「このお宅は昨年もその前も行った」という所が割合に多く、普段から「嬉泉祭りバザー」にと品物を取っておいてくださる気持ちに感謝した次第です。

手芸品の作成においても、バザーの日程が決まってから御父母の方々が作られる作品の数は限られてしまうので、地域の編物教室や同好会にお願いしたところ、快く引き受けてくださりたくさんの作品を作成してくださいました。材料を提供してくださるお店もあり、全て寄付していただいたものです。作品のために買った材料ではない物を使って作ることは、技術的にも気持ちの上でも大変なことだと思いますが、上手に組み合わせて作品一つ一つに心がこもっているのを感じ感謝しました。

「嬉泉祭りバザー」は一四回を迎えましたが、今は地元の皆さんに浸透し、目には見えないいろいろな方の心遣いに支えられていることを強く実感した次第です。

（袖ケ浦のびろ学園　山根園長）

職員の思い

この仕事が好きだから

板垣里美

私は、「嬉泉」にお世話になって九年目を迎えました。短気な私がずいぶんと腰を落ち着かせたものだと信じられない気持ちもしますが、「やっぱりこの仕事が好きだから…」で言い尽くされるように思います。

先日、今年就職したばかりのHさんに「自分らしく、利用者の方と関わりが持てれば言いね。」と話をしながらなかなか「自分らしく」振る舞えなかった自身の事を思い出していました。どこかぎこちなくて、こんなはずじゃなかったのになと思いながら時が流れていくばかりで、消化不良を起しているような気持ちの時がありました。そんな気持ちをまとまらないままに思い切ってグループリーダーに打ち明けた時に丸ごと受け止めてくださって、「こうしてみたら…」と、目標を示された事があって、その事がきっかけで自分の中でもやもやしていたものがふっきれたように思います。何事も人に話す事から始まるようです。利用者の方にがむしゃらになって挑んでいった事もありました。自分に段々余裕が無くなって、気持ちがボロボロになりかけた頃、見兼ねた仲間から随分辛口の批評を受けました。恥ずかしいと思うと同時に救われた気持ちがしました。そういう仲間は、貴重です。

「燃え尽き症候群」というものがあるそうです。私にもそれに近いものがあるように思っています。「細く、長く」をモットーに利用者の方と関わっていきたいし、先輩、同僚とも関わっていきたいです。また、自分が利用者の方の前に立った時に「しなやかにすっとしていたい」と、思うこの頃です。

（袖ケ浦のびろ学園指導員）

嬉泉の出来事

高島平五丁目福祉園
新園長よりのご挨拶
酒井縁男

本園もオープン以来二年目を迎えましたが、行政当局、地域の方々、保護者の方々を始めとする関係者のご支援とご理解により円滑に推移しておりますことを深く感謝しております。

開設準備から大変苦労された渡辺園長の後を受けて四月から勤務しております。

定員も倍増し、四〇人となり、職員も二十四人と世帯が大きくなりました。

障害の態様の様々な心身に重いハンディキャップを負った一人ひとりにそれぞれが満足した援助指導の生活の場を確保することの困難さを痛感しております。

お互が理解し、理解され、信頼関係を深め、個別のニードに適切に対応できるよう最大限の努力を積み重ねていきたいと考えております。また援助指導の効果をより高めるためには、保護者の方々との連携をより緊密にして、ご協力を得たいと考えております。

来年度は赤塚福祉園が開設され正念場を迎えますが、人材の確保が社会福祉施設に共通した難題として重くのしかかっております。

資格制度が整備され、人材確保法が制定され、事の重大さの認識が高まっておりますが、それを実効あるものにするためには、何をすることが必要かを真剣に考え、具体的裏付けをすることの必要に迫られております。

ご支援をお願いいたします。

酒井新園長

大型乾燥機の導入

袖ケ浦のびろ学園では、毎日大量の洗濯物が出ます。

この度、東京都の業務省力化設備整備事業による補助金を得ることが出来、大型乾燥機を導入することが出来ました。前回、同事業の補助金により大型乾燥機を導入しておりますのでこれで一挙に四〇キロの洗濯物の処理が可能となりました。整理室のおばさん達の負担が大幅に軽減され、ひいては処遇現場の療育の向上に反映されることが期待されております。

マイクロバス シビリアンの購入

袖ケ浦のびろ学園では、マイクロバスが必需車両です。利用者を家庭から分離隔離しないための毎週末の帰宅、養護学校への通学、グループ活動、社会参加、地域活動等など毎日フル回転です。

これまで使用していたマイクロバスは昭和五八年購入以来十八万km走行し、痛みがひどく整備費が年々増大してきたため、今回、社会福祉法人清水基金の助成金三〇〇万円を得て念願の更新ができましたこと改めてお礼申し上げる次第です。

（友田）

ひかりのタイムス

独立第16号

ひかりのタイムスは、広報担当の友田がアドバイザーで、利用者の山岸が平成4年度も引き続き編集長です。よろしくお願いします。前年度と同様文章の書けない利用者は、担当の指導員が仲介してインタビューする方針です。写真等も編集長が撮影致します。

従来よりより良い新聞にして充実した紙面にしていきたいと思います。今回の記事は、続・利用者の余暇を引き続き特集致します。（山岸）

●寄稿

将来の鹿児島マレーシア旅行

市川浩志

今から十五年後には、学園から十八時ごろ出て新宿へ寄ってから小田急線で小田原へ出て、東海道で名古屋へ出て、鳥羽へ寄ってから新幹線で小倉へ急行『かいもん』で西鹿児島・山川・枕崎へ行って一泊、鳴海旅館泊まって、いつもより二つ遅く出て十八時ごろ枕崎へ出て西鹿児島急行『かいもん』で博多から福岡空港へ行って、そこから全日空でシンガポールへ行って三泊四日して来たい。

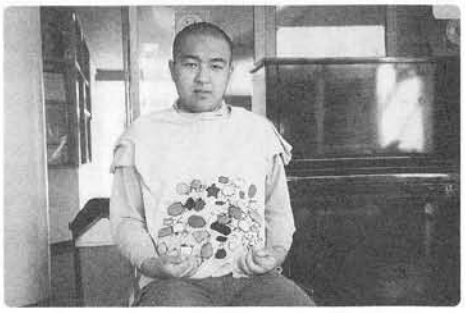
汽車で田舎へ行って海辺をながめてジャングル等を歩き回り帰りはクアランプールから福岡まで、全日空で来て博多から新幹線で名古屋夜行で東京駅に寄って学園に夜遅く帰ってきたりして、それでバターワースの海岸とかジャングルとかを探険したい。

それを一生に一回は行きたい。枕崎と鳥羽とマレーシアに行きたいとの計画を今から少しずつ考えています。

（袖ケ浦ひかりの学園利用者）

清水三千代さん・山口荒野君インタビュー

＊袖ケ浦のびろ学園利用者である、山口君・清水さんの代弁者として担当主任の板垣先生がコメントします。



山口君と作品

山口荒野君インタビュー

山岸「山口君から聞くけどなんでパッチワークやるのかな?」

板垣「最初しいの木の高等部で授業としてやっていた。形を決めて縫う。フエルトに色を決めて、自分の好きなデザインとかイメージで似た形の型紙をフエルトの上に切って縫う。糸を通すのは先生がやる。」

板垣「山口君、このTシャツに書かれているアップリケは何ですか」

山口「ウンコ・玩具・リンゴ」

山岸「何でこれが好きなんですか」

板垣「手先は器用　絵と楽器が好き。縫う事・洗濯が好き。本人にあっているんじゃない。そういうのが好きなんでしょう。」

山岸「楽器は好きなんですか。」

板垣「気が向けばメロディオ・オルガン・鉄琴を弾く。」

山岸「休みの時家で何をしてるんですか。」

板垣「お母さんの車で一緒に買い物ドライブを楽しむ。食べ物を買ったりする事や、ファミコンが好き。」

良く見てると一度やり出したら止められない感じである。何かパッチワークには本人を引き付ける魔力がある。そんな感じがする。山口君がインタビューにあきてきてインタビューした場所からの退室を板垣先生が指示する。清水さんへのインタビューへと移る。

清水三千代さんインタビュー

山岸「いつからワープロをやるようになったのかな?」

清水「二年ぐらい前から」

山岸「きっかけは」

板垣「先生がワープロを打ってるのを見て興味持ったのがきっかけ」

清水さん用意されたワープロを熱心に打つ。

板垣「今は自分の予定表を打つ段階だが山岸さんのように人に見せ

るものが打てたらいいなあ。」
山岸「どういう時にワープロを打つのですか。」
板垣「いつもはお風呂の後に打つんですよ。」
　インタビューの為用意されたワープロで本人が打った用紙に予定が書いてある。
板垣「一回見やすいように縦倍角にする。印刷されて文章が出てくるのが楽しみ。木曜日はダイエーで買い物がお楽しみ。金曜日は、お菓子作りを楽しみにしている。」
　清水さん板垣先生と会話しながらワープロを打つ
山岸「連休とか長い休み、日曜日どう過ごしているのかな」
板垣「買い物をするとあれも買いたい。これも買いたいというのでお母さんがあらかじめ用意する。連休は久し振りに買い物をした」
山岸「ひまわりの利用者の余暇の過ごし方は？」
板垣「清水さんは夜は自分でノートに書く。夜はテレビを見たりしている。学校に通ってる子はゆったり過ごす。元気がある子はトランポリンしたりブランコで過ごす。好きなものがある人はいいけれど、ない人は先生が見つける。先生がふざけたりして遊んでいる。

　ひまわりには、ギターの弾ける先生が利用者に一緒に弾こうと誘ったりする。」
　（袖ケ浦のぴろ学園利用者）

大山範子さんインタビュー

（利用者である大山さんの代弁者として、担当主任の小野先生が補足説明いたします。）
山岸「なぜビーズの趣味を始めたのですか？」
（大山さんが質問に答えられず、小野先生が彼女に聞く。）
小野「なぜ大山さんは、ビーズの趣味を始めたのですか。」
大山「糸巻もやっています。」
山岸「糸巻とビーズのどこがすきなんですか。」
（この辺は本人が答えられず、小野先生が代弁する。）
小野「糸をきれいにグルグルならべるのが好き。小さいビーズをならべるのが好きなんです。細かい作業がすきなんです。」
山岸「何年前にやっていたんですか？」
小野「ビーズは、昨年の夏から、糸巻は昨年からやっている。ストローに糸を巻くのもやっている。」
大山「ストローに糸を巻く。」
山岸「ビーズに糸を巻くのは、いつやっていますか」
大山「・・・・・」
小野「大山さんはビーズと糸を巻くのは、いつの時間やっていますか。」
大山「やすらぎでビーズ・糸巻をやるの。」
　＊ビーズは、デザインをあらかじめ書いて絵に玉を嵌めてやるキメ細かい作業です。私も見ましたが大変綺麗です。
小野「機織りの作業時間にテキスタをやっていて、その時に糸巻をやっています。」
　＊テキスタ　機織りの機械の一つの種類。棒が立っていて、棒を糸に引っ掛けて織っていく織り機の事です。実際機織り作業棟で見ましたけれど、この機械でマフラー等の織物が織られていくんだなと感じました。
山岸「大山さんは自分で作った作品はどう思いますか。」
大山「・・・・」
小野「ちょっと難しい質問だった。」
　（インタビューの私が質問につまり、小野先生が彼女にわかる質問をする。）
小野「何色をやりましたか。」
大山「テキスタやった。青・ピンク・黒・ベージュ・灰・黄緑色もやった。」
山岸「出来た作品は、バザーとか展覧会に出していますか。」
大山「出してるの。」
小野「バザーで暖簾を出品した。」
山岸「日曜日は何してるの。」
大山「お家で洗っているの。」
小野「最近家で食器洗いをしてます。」
山岸「やすらぎの人の余暇の過ごし方はどうしてるんですか。」
小野「刺繍やるひと・CD聴くひと・写真集等本を読むひと・テレビを見るひと・婦人雑誌を読むひとそれぞれに違う。手芸的なもの（クロスステッチ等）が好き。女性的な手芸が好きなひとが多い。）

（袖ケ浦ひかり学園利用者）